

昭和38年2月1日 第三種郵便物認可
平成18年2月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第37巻第2号



俳句雑誌[おき]

2月号

沖 発行所

夕ならひ

能村 研三

ひとり吟行

闇の濃さ確と見届く獵夫かな

去る人は追はず冬晴れ極むなり

早食ひも自照のひとつ十二月

市川・東山魁夷記念館

寒行の寺裏をゆく小径かな

「俳句研究」の二月号では、「ひとり吟行のすずめ」という小特集をしている。中堅俳人がそれぞれの体験を基に書いているが、中でも三村純也氏の「離見の見」という文章がおもしろかった。「離見の見」とは、世阿弥の言葉であるが、「花鏡」では、〈客席の方から見た自分の姿というのは、自分を離れた「見」(離見)である。そして自分の目で見る自分の姿というのは、自分の「我見」で見た姿であって、離見で見た姿ではない。「離見の見」とは、いわば主客一体の見である。このとき、真に自らの姿を見ることができ。〉

つまり舞台上がって演技している自分の他に観客席から、その演技を見ている、もう一人の自分を作らないと演技力は向上しないということを読んだ言葉である。

これを三村氏は「ひとり吟行の心得になるように思う。まずは、対象から距離を置いて、客観的に描写すること、そして出来た句を、今度

魁夷作「道」を貫く去年今年

花を以て北窓塞ぐ画室かな

高垣の魁夷旧居は冬構

夕ならひ六角塔は錐もみに

藤田喬平ガラスの世界二句

掛柳「琳派」てふ名の硝子管

水差しはヴェニス絵硝子初点前

は、もう一度、時間的に離れて推敲してみること、練ってみること、これが『ひとり吟行』の成果を本当に自分のものにする一つの手段、方法のように思う。」と結んでいる。

私も、初心の頃は、何度もこの「ひとり吟行」を試みた。一泊とか二泊したこともあったが、勿論、吟行だから自然や風物をしっかりと取材することもしたが、それよりも何日間か自分ひとりになって、自分を見つめなおすことが出来たのもうれしかった。

「ルネッサンス沖」この言葉を自分に言い聞かせるには、もう一度初心に帰って、今年は自分を見つめなおす「ひとり吟行」にも出かけたかと思っている。

能村 研三



くつさめ 林 翔

朴歯の下駄

今日は冬至。「沖」の本部がある市川市をはじめ、千葉県ではまだ雪が降っていないが、全国的な大雪のニュースが毎日流されている。

「地球温暖化」などが叫ばれなかった時代、私の住んでいた東京も、けっこう大雪が降ったものだった。

小学生時代、私の家がある本郷区駒込林町（現、文京区千駄木三丁目）から千駄木小学校までの距離は晴天なら徒歩10分ぐらい。春ならば桜並木の下を通っていたのだが、雪の日はひどかった。

クラスで洋服を着ていたのは社長の息子K君と医者のお子N君だけ。あとは全員着物に行燈袴である。履物は下駄。学校で草履又は運動靴に履き替えるのだ。

或る大雪の日、桜並木の下でなく近道を選んだのだが、高下駄の歯の間に入った雪が団子のようにになってしまい、歩けなくなった。やつとこのことで或る家の門柱に辿り着き、下駄をぶつけて雪を落したのだった。

その高下駄が朴歯であったかどうかまでは覚えていない。朴歯の下駄と言えば旧制一高の生徒を思い出すが、子供用の朴歯下駄もあったので

ルネッサンス
Renaissance てふ言葉佳し年新た

音立てて時は流れつ室の花

風花や見知らぬ町に迷ふとき

舗装路と枯葉の乾燥交響曲

太郎冠^{かじ}者^やくつさめ客は噓せり

宥さむか冬蠅の天寿奪はむか

枯れたりと言はじ真白の冬芒

まだ落ちぬ葉も煙らせて落葉焚

水洩一升子規には遠く及ばねど

御利益も散り敷きませよ大銀杏

市川市大野三社宮

ある。

何歳の時であつたか判然としないが、修学旅行から帰ってくる姉を迎えに行くと父に命じられた。自宅から上野駅までは、急げば徒歩20分ほどである。谷中^{やなか}を通つて上野に出ると、やや急な坂道の下に上野駅がある。気が急いで小走りになっていた私は坂道で転んでしまい、右膝を打撲して翌日から医者通い。朴菌の下駄のせいである。

林 翔



蒼茫集



冬の噴水

柴田雪路

人待つや冬の噴水折れ易きは
はの智恵奥の手として十二月
泣き噓り止まぬ子に来る雪女
思ひ出にすこし罎入る初氷
初雪に会ふ子の睫毛しばたたく

物ぐさ太郎

吉田明

短日のきはまる帽子かぶりいづ
極月や開閉繁き自動ドア
鯛焼買ふ列のまんなか母がある
物ぐさ太郎になるよと蒲団はぎし母
葱刻む音牛蒡そぐ音年つまる

冬の園

坂本俊子

白鳥を見し夜の湯浴みねんごろに
雪ぼたるきつと魂こんな色
顔見世や亡き夫きつと鬻り付き
冬の園弁当食うて男去る
音もなく鯖街道を雪女

神奈備

上谷昌憲

三輪山に昼月歪む神の留守
耳成の山の神韻木の実降る
藁ぼつちまほるばのわが現在地
大和三山己が鬻りに眠り初む
冬夕焼二上山の鞍部たわけぶり
神奈備の山裾暮れて木守柿

潮鳴集

顔

中島あきら

木枯を耳に満たしてきし顔か
羽づくろふ音のかすかに羽蒲団
数へ日の夜や人形の舞ひ納め
てのひらを月光滑る寒の入
冬枯を風の韋駄天走りかな

湧水 頓所友枝

蒼天の句読点なりななかまど
湧水の碧をかさねて富士眠る
山小屋の明日は閉ざすと茸汁
凧やセロファン脱がす新刊書
遊びをせむと山茶花の白眩しかり

梟

広渡敬雄

山眠る等高線を緩めつつ
黒々と鯉が沈めり大試験
猪鍋や炭の弾ける音の中
梟に腕あれば腕組むならむ
雪舟自画像唇のあたたかし

椎の闇 坂ようこ

枯蔓をひとたぐりして子の遠し
黒塀に風うらがへり一の酉
光発すけさ裸木となりし楡
ふるさとは椎の闇なり葉喰
老杉を縛し藤蔓凍てにけり



沖作品



能村研三選

億年を戦はずしていま海鼠

海鳴りを断つかに能登の冬構

小春日の塀に靴干す子沢山

赤松の木肌艶めく冬はじめ

島裏は断崖つづき石路咲けり

船宿の魚拓べた貼り小六月

石棺に実生のいのち露しとど

休止符のやうに離れて海猫一羽

川靄の奥の光量草もみぢ

青天へ展ぐ家族図干布団

新雪が山に来てゐる豆ぼつち

牡丹焚く夜のざうざうと松林

牡丹供養炎に投げ入るるわが一枝

炎の奥の血輪たれかれ牡丹焚

牡丹焚熾火いきづくコア息づく

千葉

佐々木よし子

大沢美智子

埼玉

服部 早苗

着ぶかれていつもの母の大きこと

里山のみ使ひのやう冬の蝶

未来とふ赤子を抱きぬ冬の星

ありつたけ木の実拾ひて温もりぬ

生きてゐる目印のやう実南天

力みては柝の音をにごす夜番かな

花丸と風邪もらひけり保育園

冬構濟ませ弟逝きにけり

鮫鱈の口のみ鉤にのこりけり

山坊のストープ真つ赤祓ひ待つ

木の葉散る交通調査のパイプ椅子

冬立つや尾鱈に荒く化粧塩

日の微塵浴びて狐の大き耳

冬つばき箒目白く乾きをり

羽ばたきの音を滑らせ水面鏡

埼玉

瀬戸かづこ

東京

石川 笙児

菊地 光子

潮さぬを断つて隼急降下

千葉

安藤しおん

菊を焚く陶淵明も咽びしや
柚子回る湯に抱卵の鶏ごち

類想は麻葉にも似て霜降る夜

賢さの外は省略ちやんちやんこ

夜霜なる横臥おのづと膝折れて

巻ぎくるる子のマフラーの微体温

人づての訃報のやうに綿虫は

泣き寝子をジャケツ包みに渡さるる

トレモロは星の清音生誕樹

霜日和巢箱の穴のよく見えて

小春日やつかまり立ちのおもしろく

熱爛や団塊世代になほ力

銀杏散るその輝きの中に散る

潮入りの池を眠らせ石路明り

逆流の河口しぶきてゆりかもめ

白山を離れぬ雲や大根干す

しぐれつつ夕映えおよぶ文学館

山壁の海へせり出す冬の雁

式台にちちの友禅屏風かな

寒波来て鼻のアンテナありにけり

風の町となりたるときの根深汁

霜枯や板の上なる素焼磁器

宮守の太鼓打ち込む除夜詣

東京

齋藤 實

市川市

代田 幸子

石川

中野 了一

江ノ電の小春の中に海がある

千葉

篠藤千佳子

黄落や素焼き茶碗にあるぬくみ
烏瓜ひいて明るき小川かな

胡桃割る青き地球の中にかな

繕ひにかすかな意匠秋の蜘蛛

夜咄の微妙な呼吸手燭の灯

ゆるゆると時止まるかに大根炊く

延暦寺の陶瓦かがやく冬の朝

寒波急板を泣かせて釘を抜く

柿さらす目はくれなゐに寝間ふかめ

はればれと十年当用日記果つ

枝影の切り込んでゐる榎櫃の実

鶴一羽無重力なる着地かな

蓮根掘る城の周りに人垣す

平らかな心ひとつの年果つる

頬近く装ふ毛皮野生の目

冬の虹水平線にかつと立つ

冬帝も来し僧正の大葬儀

白菜や家族の箸の色ちがひ

太陽の種かも知れぬからすうり

西の山暮れても蕎麦の花明かり

夜神楽や星座は銀の大網目

冬うらら五岳の寝釈迦口開けて

蟪蛄死す最後の祈りしたらしく

福岡

伊藤 冬留

長崎

阿部 順子

大分

河野美千代

鶴見 遊太

上田 玲子

沖作品 15 句選評

*

能村研三

億年を戦はずしていま海鼠 佐々木よし子

一見してグロテスクないでたちだが、食材としては天下の珍味として珍重されている。最初に海鼠を食べた人は余程勇気があっただろうといわれるが、その歴史は古く海産物の神饌として食されていた。形状は、どちらが頭だか尻尾だかもわからないほどで、棘皮動物といわれ、動物の中でも最も下等な部類に入るのかも知れない。だが、何億年もの間全く進化もせず、同じ形状のまま今にその姿を伝えているとしたらこれもある意味では見事である。そんな動物であるからこそ、闘争本能などは皆無で、本当の意味での平和主義者なのかも知れない。だからこそ、長い時間をこのまま形を維持し続けたのだろう。

青天へ展ぐ家族図干布団 大沢美智子

冬によく晴れた日、一斉に家々では布団が干される。二階のベランダや屋根にも載せる場合もある。カラフルな柄の布団や、子供用に小さな布団もある。家ごとに干されてある布団をつぶ

さに見ていると、確かにその家の家族構成がわかる。あの家は新婚さんの家だとか、子供の人数などもある程度予測が出来る。布団を干すのにも、恐らくは家族への愛を万遍なく施すために、家族全員の布団を干すことになる。家々のベランダに干された布団はまさに家族図そのものである。家族図という言葉が温かくてよい。

牡丹焚く夜のざうざうと松林 服部 早苗

牡丹焚は福島県須賀川の牡丹園で十一月の第三土曜日に行われるもので、毎年美しい大輪の花を咲かせて天寿を全うした牡丹の枯木を供養する風情のある行事で、今では全国的にも知られるようになった。今回は「沖」の人たちも多くが吟行に訪れたようだ。須賀川には行ったことがあるものの、私はまだ実際に見たことはない。写真などから想像すると夕闇の中に燃え立つ青紫色の炎が幻想的で牡丹の精を思わせる。あたりは松林なのだろうか。何か幻想的な行事であるだけに、「ざうざう」という擬態語も効いている。

着ぶくれていつもの母の大きこと 瀬戸かづこ

表現が工夫された句である。下五で「大きこと」と述べながら実は年老いて小さくなってしまった母のことを述べているのである。寒さを防ぐため、しっかりと衣服を着込んでしまった母は、まんまると体がふくれて見えた。いくら何でも少し着込みすぎじゃないの。しばらくぶりに会った瞬間は、少し肥ったかと思いきいで、やや安堵した気持ちになったものの、それは何枚も着込んで着ぶくれているためだということが後でわかった。やはり、齢と共に多くを着込むのも寒さからの自衛手段なのだろう。肉親を思いやる気持ちが素直に描かれた句である。

(以下略)